平成３０年度埼玉県英語教育強化推進事業
（文部科学省委託「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」）

平成３１年１月３１日（木）

白岡市立南小学校
白岡市立南中学校

あいさつ

現在、グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっております。

この度、白岡市立南小学校、白岡市立南中学校が文部科学省委託「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」を受け、教職員の外国語及び外国語教育の指導力向上に取り組んで来られました。中でも、小学校と中学校の接続を意識した授業づくりをはじめ、会話の相手や目的、場面を意識した学びとなるような授業づくりは、新学習指導要領の完全実施に向け、大いに参考になるものと期待をしております。そして、本事業をとおして、子供たちが、外国語をもちいて積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿が育っているなど、研究の成果をあげておりますことに、感謝申し上げます。

この度の取組の成果が、引き続き教育活動の充実に生かされ、今後の教育実践に広く寄与されますことを心から願っております。

結びに、本研究に意欲的に取り組んで来られました両校の校長先生をはじめ、両校の諸先生方に敬意を表しまして、あいさつといたします。

白岡市教育委員会　教育長　長島秀夫

２０２０年の小学校新学習指導要領の全面実施を見据え、南小学校では、今年度より外国語活動(３，４年)を週１時間、外国語（５，６年）を週２時間、教育課程に位置付け、先行実施をしております。外国語による表現の楽しさを十分に味わわせ、「外国語を使って相手とコミュニケーションをとってみたい」という気持ちを子供たちに育ませることは、学校教育にとって重要な使命と捉えています。

本研究では、年間指導計画の作成や学習環境の整備、家庭との連携など、様々な角度から具体的な取組を実践してまいりました。特に、小中連携を重要課題の一つに位置付け、９年間を見通した外国語指導のあり方について小中合同で継続的に研究を深めてきたことは、学習の系統性や共通の指導方針を確認する上で貴重な時間となっています。御参会の皆様におかれましては、南小・中学校のめざす方向性や外国語指導のあり方などについて忌憚のない御意見・御指導を賜ることができれば幸いです。

終わりに、本校の研究推進にあたり、常に懇切丁寧な御指導・御支援を賜りました文教大学教育学部教授金森強先生、埼玉県教育委員会、東部教育事務所、白岡市教育委員会の諸先生方をはじめ、関係の諸先生方に心より感謝と御礼を申し上げ、あいさつといたします。

白岡市立南小学校長　辻　文明
白岡市立南中学校長　吉野高男

小学校の研究の概要

学校教育目標
・進んで表現できる子
・心豊かに生きる子
・たくましく元気な子

児童の実態

保護者・地域の願い

教師の願い

研究主題

進んで、自己表現できる児童の育成

＝レッツ・トライ・イングリッシュ＝

～コミュニケーション能力を伸ばす指導法の工夫(9年間を見通した外国語活動)～

主題設定の理由

本校は、白岡駅近くに位置し、722 名の児童が在籍している。児童のほとんどは、他の小学校と交わりもなく、地元の中学校に進学をしている。そのため、幼い頃からよく知る仲間の中で自分の思いをうまく表現できず 9 カ年を過ごしている児童も多い。本校はこれまで国語科の学習を通して「自ら考え、確かに表現できる児童の育成」に取り組んできたことにより、学習に対する意欲の向上、書くことへの抵抗が減り自分の思いを進んで表現する力がついてきた。一方、相手とのコミュニケーションを通して自分の思いを伝えることに課題が残った。

そこで、今年度は英語科の学習を通して表現する力をつけ、国語だけではなく、英語による表現の楽しさを味わい表現の幅を広げることを願い、本研究主題を設定した。また、英語教育を通して小·中をつなぐことに重点を置き研究を推進したいと考える。

研究の視点

○ 9 カ年を見通した指導計画の作成
○ 4 技能をバランスよく身につける授業展開の工夫

研究組織

校長 → 教頭 → 研修推進委員会 → 全体会 → 授業研究部・環境整備部・調査分析部 / 学　年　部

研究の仮説

仮説１

１時間の指導計画や単元計画を明確にすることにより、児童は課題をしっかりとつかみ、進んで学習に取り組むことができるだろう。

＜手立て＞

・南小スタンダード（1 時間の学習の流れの標準化）の定着

・年間指導計画･シラバスの作成

仮説２

中学校や関係機関、外部専門機関等との連携を深めることにより、9 年間を見通した外国語活動の学習活動を進めることができるだろう。

＜手立て＞

・小中連携、Ｊプラン教員、ＡＬＴとのさらなる連携の充実

・外部専門機関等による専門研修の実施

・小中合同の外国語活動を活用した行事の開催

仮説３

教材･教具の工夫や学習環境を整えることにより、児童は意欲的に学習に取り組むことができるだろう。

＜手立て＞

・クラスルーム･イングリッシュカードの作成と活用

・英語の歌の積極的活用

・英語の絵本の読み聞かせ

・外国語コーナー･校内掲示の充実

仮説４

学校･家庭･地域･教職員が連携をし、外国語に「触れる」･「親しむ」･「使う」機会を増やすことにより、児童は外国語を身近に捉えることができ、外国語に対する意欲もさらに高まるだろう。

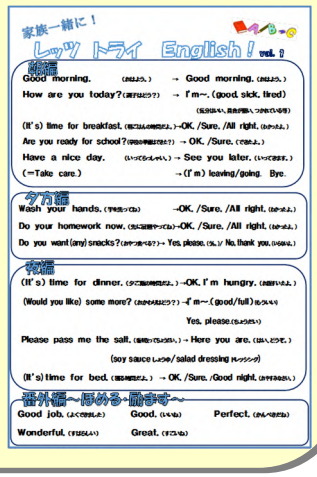
＜手立て＞

・家族一緒に「レッツ･トライ･イングリッシュ」英会話集

・ホームページ・学年だよりなどでの積極的な家庭への啓発

・「英会話ワンポイントレッスン」を教職員配布の日報に掲載

・学習参観日での外国語授業の公開



授業研究部　確かな力をつける指導法の研究

教員の指導力の向上

外部専門機関等による研修の実施

文教大学教育学部　教授　金森強先生

ご指導を受けての今後の課題

- 自然なコミュニケーションにつながる言語活動（英語を用いる場面・必要性）
- 単元計画の工夫（子どものゴールを見据えて）
- 評価の工夫（中間評価・振り返り・Can Do リスト）

校内研修の推進

絵本の読み聞かせ研修

Classroom English の活用

研修の結果、
- ALT とのコミュニケーションを、積極的にとっている。
- Classroom English の語彙数が増えるとともに、授業中に活用する場面も増えている。

など、教員の意識が向上している。

中学校との連携

中学校英語教諭との合同研修

Ｊプラン教員との連携

Ｊプラン教員による校内研修

担任・ALT・Ｊプラン教員による授業打ち合わせ

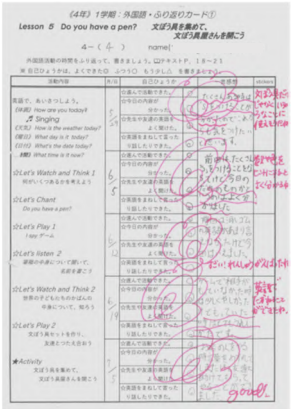
南小スタンダードの確立

１時間の学習の流れ

コミュニケーションポイント

振り返りカード

4年



【振り返りの項目例】
- 進んで活動できた。
- 今日の内容が分かった。
- 先生や友だちの英語をよく聞けた。
- 英語をまねして言ったり話したりできた。

教師の声かけで視点を与え、単元のめあてに即した振り返りができるようにした。

環境整備部　言語活動を支える環境の整備

児童と保護者が英語に親しむ機会を増やす環境整備

校内の掲示

階段を使っての掲示

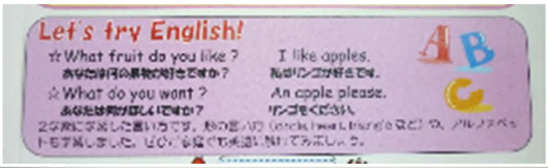
国際理解教室前の外国に関する掲示

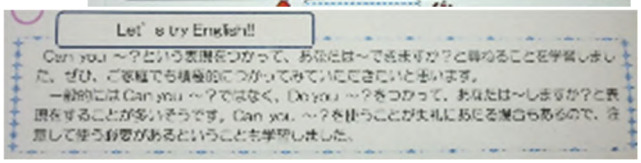
めくって楽しめる掲示の工夫

Let's try English !

英語の教室表示

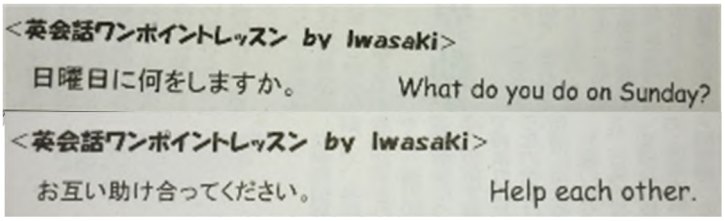
全校で取り組んでいる学年だよりの英語コーナー





教員の英語力の向上を図るための環境整備

日報の英会話ワンポイントレッスン



職員室で英語に触れる機会を増やす

英語の絵本や資料を
校内研修コーナーに設置

国際理解教室の背面の掲示

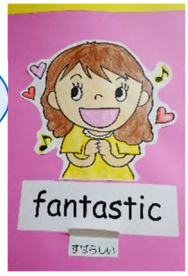
授業で困った時の
手助けになる掲示

進んで自己表現ができるようにするための環境整備

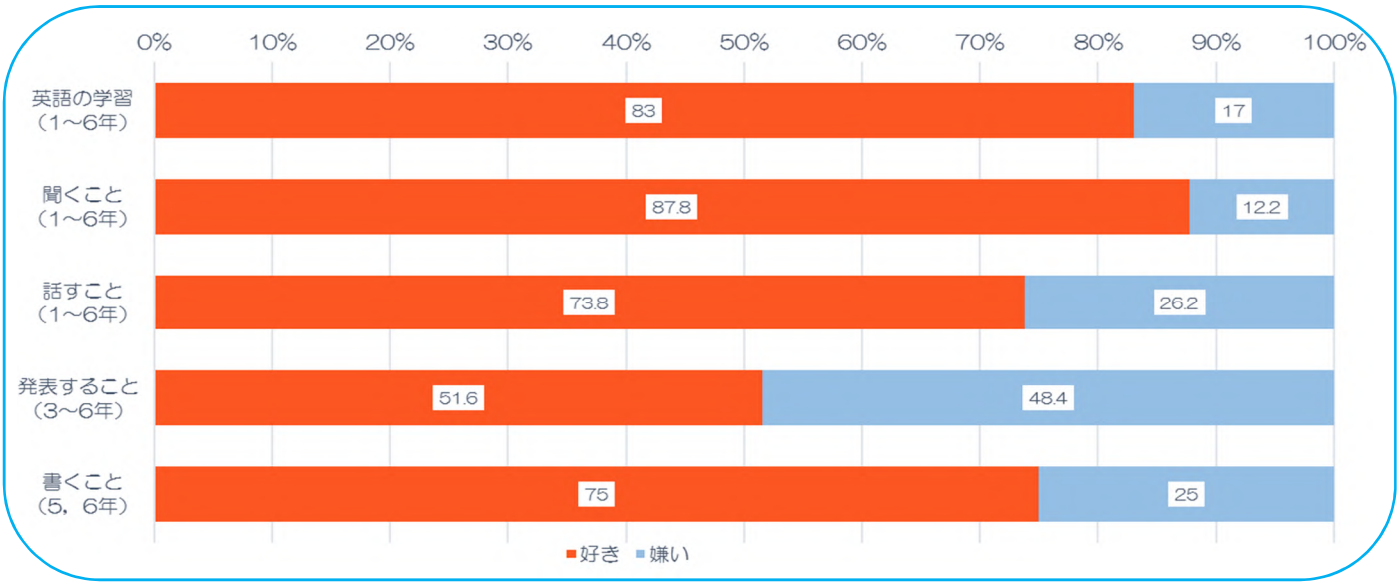
対話のモデル一覧表

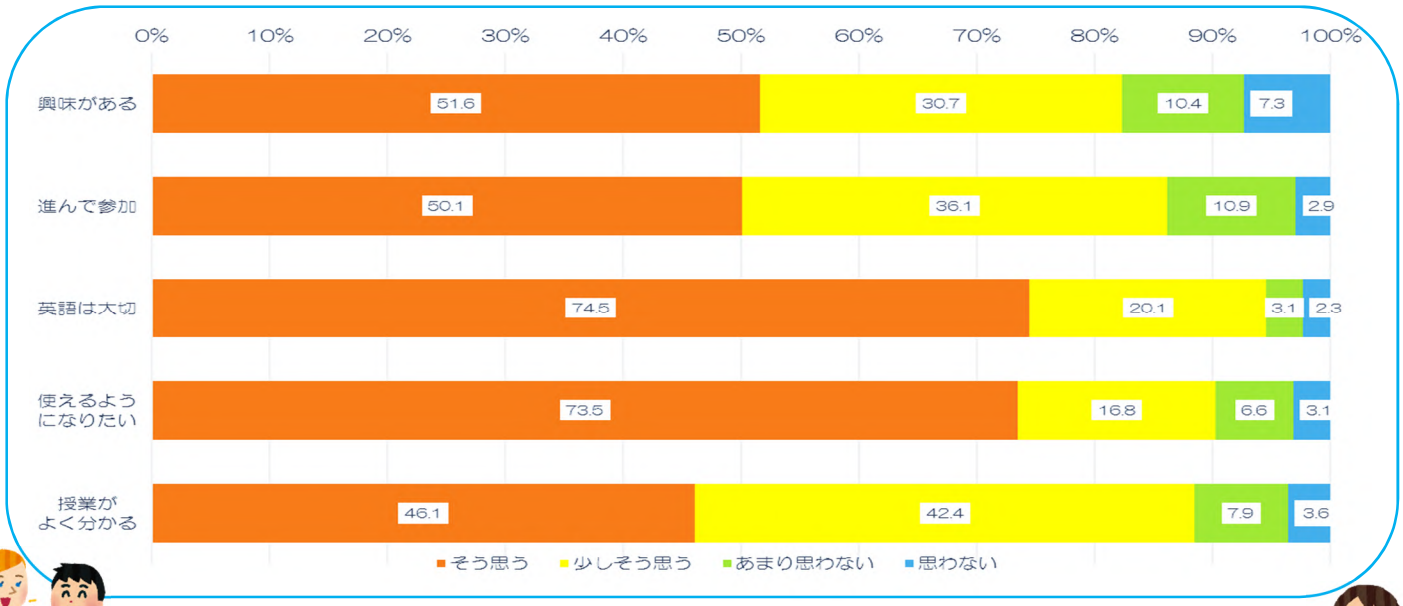
自己表現の幅を広げる
ための掲示

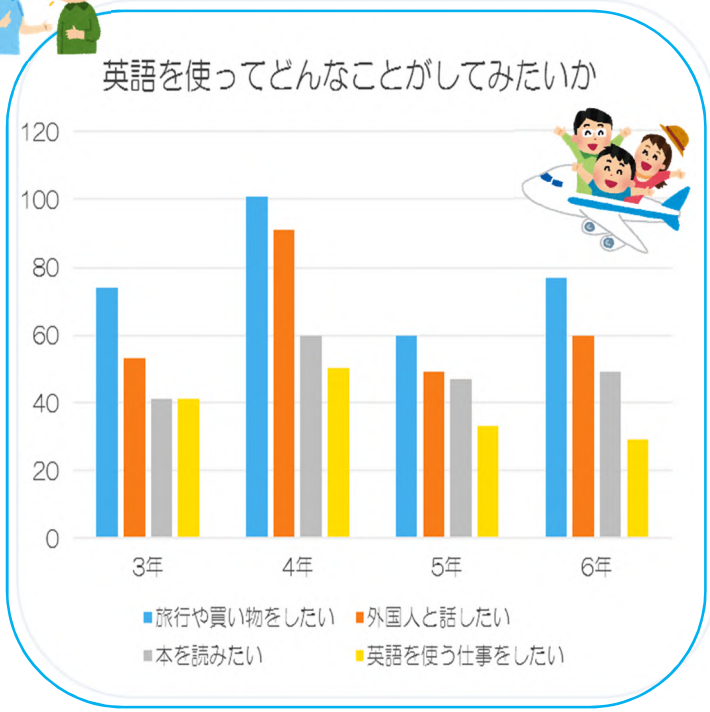
自信を持って自己表現する
ための対話の流れ掲示



調査分析部　児童の実態　アンケート結果より





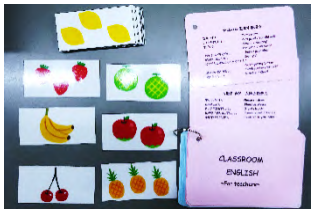


考察

① 英語の学習をすきな児童は全体の８３％いる。
② 発表することは、英語に限らず苦手な児童が多い。
③ 聞くことが好きな児童は約８８％と多い。
・話すことが好きな児童は約７４％と、聞くことに比べて少ない。
⇒まず聞くことを充実させ、身に付けてから、話すことや発表につなげていくことが望ましい。
➡外国語の本などの読み聞かせや教師の small talk などの充実を図っていく。
④ 英語は大切であると答えた児童は約９５％、使えるようになりたいと答えた児童は約９０％いる。
・進んで授業に参加していると答えた児童は、約８６％と少なくなっている。
⇒外国語を学ぶことの有用感は感じているが、積極的に学ぶことはまだ課題が残る。
⑤ 英語を使って「旅行や買い物をしたい」「外国人と話したい」という児童が多い。
➡日常で使える会話表現を授業で多く取り入れ、コミュニケーション能力の育成や、意欲の向上を図っていく。

小学校の授業実践

１年生



１　単元名「くだものいっぱい」

２　研究主題に迫るための手立て

仮説３「教材・教具の工夫や学習環境を整えることにより、児童は意欲的に学習に取り組むであろう」

授業中に役立つ英語満載のカード「クラスルーム・イングリッシュカード」を、教師が指示するときやほめるときなどに積極的に活用し、児童の意欲につなげるようにする。また、くだものやさんごっこをする際に売り買いする「くだものカード」や、会話の流れを学習する際の「conversation map」など、絵の掲示物を多くする。

３　指導の実際　　えいごをつかって、くだものやさんごっこをしよう

物の名前には上位語と下位語があり、上位語が店の名前になることや、下位語が一つ一つの売り物の名前になることを理解し、店員と客になってやり取りをした。くだものの名前を覚え、単数形と複数形について知った。複数形を用いて正しい文で「〇〇　please.（〇〇をください）」「Here　you　are.（はいどうぞ）」「Thank you.（ありがとう）」という会話の流れを言えるようになり、くだものやさんごっこを楽しんだ。

４　成果と課題

会話の流れを練習する際、教師と児童・ALT と児童・児童同士というように、相手を変えて何度も練習を繰り返し行い、定着を図ったことにより、くだものやさんごっこでスムーズに交流することができた。自分の欲しいくだものを、英語を使って手に入れられる喜びを感じ、積極的に英語を活用する機会を得ることができた。

２年生

１　単元名　「ハロウィンを楽しもう」

２　研究主題に迫るための手立て

仮説３「教材・教具の工夫や学習環境を整えることにより、児童は意欲的に学習に取り組むであろう」

本単元では、児童にとって身近な季節の行事になりつつある「Halloween」を扱う。何種類かのお菓子の中から自分の好きなお菓子を選んで友達と伝えあったり、好きなお菓子を ALT や JTE, HRT に伝えてそのお菓子のカードをもらったりという活動の中で、英語でコミュニケーションする楽しさを味わい、意欲的に活動できるようにした。

３　指導の実際　　じぶんのすきなものをえいごでつたえよう

ハロウィンの催しになぞらえ、５つの中から自分が好きなお菓子を選び、ＡＬＴに自分で伝えることを最終目標としたことで、前時までの練習にも積極的に取り組むことができるようにした。

４　成果と課題

会話の流れをシンプルにし、イメージ図を用いることで、フレーズが覚えやすくなり、言葉に気持ちをのせて伝えることができるようになった。また、活動の中で、ジェスチャーや相槌などを用いてのコミュニケーションをし、より自分の気持ちに近い表現ができるようになった。

また、会話を実際のコミュニケーションに近いものにし、自然なやりとりに親しませることができるよう、会話の内容の精選が課題である。

４年生

１　単元名　　Unit５　　「Do you have a pen?」

２　研究主題に迫るための手立て

仮説３「教材・教具の工夫や学習環境を整えることにより、児童は意欲的に学習に取り組むであろう」

本単元では、１人１セットの文房具カードを用意し、そのカードを使って友達と交流していくことで、児童が興味をもって意欲的に学習に取り組めるようにする。また、２人で行ったりグループで行ったりと学習形態を工夫し、多くの友達とコミュニケーションを取ることで英語を使って会話をする楽しさを味わわせ、児童の苦手意識をなくしていくようにする。

３　指導の実際　　文ぼう具屋さんを開くために、文ぼう具を集めよう！

グループごとに文房具屋さんを開くためのミッションカードと文房具カードを渡し、「Do you have a ～？」を使って必要な文房具カードを集めた。グループごとに異なるミッションカードと文房具カードを渡すことで、グループの友達と協力して文房具カードを集めなければならないようにし、英語を話すことに苦手意識がある児童も英語を使って積極的にコミュニケーションを取れるようにした。

４　成果と課題

Activity では、グループごとに異なるミッションカードにしたため、カードを集める必然性が生まれ、児童は積極的に友達と会話をすることができた。しかし、ゲームをクリアすることが英語を話す目的になってしまったので、今後は自分の思いが話せるような活動を展開していく必要がある。

５年生

１　単元名　　Lesson５　「What do you want？」

２　研究主題に迫るための手立て

仮説１「１時間の指導計画や単元計画を明確にすることにより、児童は課題をしっかりとつかみ、進んで学習に取り組むことができるだろう。」

授業では南小スタンダードを活用し、児童が見通しをもって学習に取り組めるようにする。また、授業の流れを毎時間同じにすることで、児童がその時間の課題に正対できるようにする。さらに、スパイラルに学習を積み重ねることで、前時の学習内容を生かしながら積極的に取り組むことができるようにする。

３　指導の実際　　What ～ do you like?を使って、Ｔシャツの持ち主を探そう。

前時に児童が描き合った、色や柄が異なるＴシャツを６枚提示し、「What ～ do you like?」を使って相手の好きなものを尋ね、誰のＴシャツなのかを探した。複数のＴシャツを提示したことで、相手の返答から質問内容を変えていく必要性をもたせ、児童が臨機応変に思考しながら会話をするようにした。

４　成果と課題

Small talk で子どもを巻き込みながらＴシャツの持ち主探しをしたことで、児童はどのようなフレーズを使用するのか、どんな手順で探せばよいのかなどについて見通しをもつことができた。また、「誰のＴシャツなのか持ち主を探す」という Activity の目的が明確であったため、児童は積極的に交流を図ることができた。

中学校の研究の概要

1　研究主題について

本校の生徒の多くは、小学校時代に十分に英語に慣れ親しんできたこともあり、英語の授業に対し前向きに楽しみながら取り組んでいる。一方、即興で話をするなどの自己表現に対して苦手な様子が見られた。そのため中学校英語科では、「コミュニケーション能力の向上を目指す授業の創造　～小学校外国語活動との円滑な接続を目指して～」に重点を置き、授業改善に努めた。

2　具体的な取り組み

まずは英語に触れる機会を増やすため、教師と生徒ともに積極的に Classroom English を使うよう心がけた。前もって使える Classroom English を一覧にしておき、その中から「I have a question.」や「Sorry, but I left my textbook at home.」など、言えることは極力英語で言わせるようにした。また、教師の発話もほとんどを英語にし、英語のシャワーをたくさん浴びせることを心がけた。

即興での会話力を身に着けさせるため、授業の最初の時間を使ってChitchatという帯活動を行った。カードを用い、相手に質問し、最低2回は会話を続ける、というルールで行っている。その際、ただ自分の質問をしたり、相手の質問に答えたりするだけにならないよう、相手の目を見て話すこと、相手の言葉に対して相づちを打つことを徹底するようにした。

授業での Activity は、単なるパターンプラクティスになってしまわないよう、自分の思いを乗せることができる活動を取り入れた。また、不自然なコミュニケーションとならないよう、必然性のある、自然な場面設定にも気を配った。

授業外でも、生徒の自己表現力、コミュニケーション能力を高める実践を行った。昼休みに英語教員やALTが English Roomに集まり、生徒と英語のみで会話をする、という場を設けた。ポイントカード制にすることで、多くの生徒の参加が見られた。また、部屋の雰囲気を出すために、世界の国旗を掲示したり、他国の現地時間に合わせた時計を設置したりしている。さらに、英検のテキストを誰でも使えるように配備している。

3　成果と課題

Classroom English を多く使用することで、英語を聞く、話すことに抵抗がなくなり、授業中は英語で話すという雰囲気ができあがった。毎時の Chitchat により、英語で表現することに抵抗が少なくなったと感じる生徒が7割にのぼった。相手の目を見て話すことや、内容に合った自然な相づちを打つことも自然にできるようになった。昼休みの活動の効果もあり、生徒が教師に話させられるのではなく、自らすすんで英語で話すようになり、準備がなくてもある程度のことは即興で話せるようになった。何より、生徒が英会話を楽しむようになったのが大きな成果である。英検への意識も喚起され、受検者数は前年（2017 年度）と比べて、今年（2018 年度）は約 2 倍、180%を超えた。

一方、小学校で慣れ親しんできた話すことに比べ、書くことに対しては未だに苦手意識が残る。以前は白紙が多かった作文問題に対し、自分の考えを表せるようになった生徒は増えたものの、スペリングのミスなど、細かなミスが見られる。今後も定期的にテストを行いフィードバックするほか、授業内での観察や宿題の丁寧な点検などで支援していく必要がある。

英語が好きになった生徒は増えたが、英語への関心や能力には差がある。テストの点数にも開きがあり、English Room に来る子も固定されてきた。できるようになれば楽しいと感じてくるはずなので、学力差を埋められるよう授業内外で支援に努め、多くの生徒に英語を楽しいと感じさせられるようにしたい。話すこと・聞くことなどの能力は育ってきているので、読むこと・書くことも含め4技能のバランスのとれた習得にも留意しながら指導していきたい。

中学校の授業実践

３年生

１　単元名「Talking Time　Shopping」

２　研究主題に迫るための手立て

自分の思いを英語で伝えることができる生徒を育成するため、授業では多くの自己表現の場を設けた。またその際に会話が不自然なコミュニケーションとならないよう、日常の英語使用の場面を想定し、より自然で必然性のある場面設定を心がけた。同時に、生徒が積極的に話したくなるような課題づくりも意識した。本校の生徒は特に即興での会話に苦手意識が見られるため、なるべく準備を少なくしての会話にも多く取り組ませた。デモンストレーションからALTを活用し、実際に使える英語であることを自覚させるとともに、生徒とALTが話す場面も設け、自分の英語が伝わる喜びを味わわせるようにした。また、4技能をバランスよく育成するため、生徒にとって比較的抵抗の少ない話す活動から入り、それを文字にすることで苦手な書く活動にも円滑につなげられるようにした。

３　指導の実際　　自分の欲しいものを英語を使って買おう。

「I' m looking for　～」や「I' ll take them.」といった買い物で使われる特有の表現を扱う単元である。生徒にとっては店員の立場よりも客の立場をとる機会の方が多いと思われるので、客が使う表現をより重点的に指導するようにした。ALTとのデモンストレーションから始まり、それぞれの表現の理解と口慣らし、パターンプラクティスを行った後で、ペアによる会話を行った。その中で、買う物の色やサイズ、値段を変えたりして多くの練習の場を設けた。最後にはALTとの１対１での Speaking Test を行った。ALTが店員、生徒が客となり、引いたカードに書いてある物を買いに行くというテストである。机の上に商品のカードを並べ実際の店を模した状況の中で行った。

カードの例：

Mission!
赤色のMサイズの
Tシャツを購入せよ！！
＊予算は５ドル

Mission!
緑色のMサイズの
帽子(cap)を購入せよ！！
＊予算は15ドル

４　成果と課題

多くの練習の場を設けたことで、買い物特有の表現をたくさん口慣らしさせることができ、生徒が抵抗なく取り組め、定着にもつながった。買い物の条件を様々に変えたことで飽きずに練習に取り組ませることができたほか、どんな状況でも必要に応じて英語を変化させて対応する力も身に着けさせることができた。Speaking Test においても、買う物がテスト直前に決まるため即興性が求められたが、多くの生徒が正しく買い物をすることに成功していた。正しく言えない生徒も、何とかして必要な商品を手に入れようと努力する姿勢が見られた。また、テストを実際の店に近い状況の中で行い、ALTと商品のカードを受け渡したりしながら会話することで、臨場感を味わわせ、本物に近い会話を体験させることもできた。自分の英語が伝わる喜びを感じさせるとともに、将来海外で買い物に行った際にも使える生きた英語となったように思われる。

Talking Time という単元の特性上、話す活動に重点を置いて指導したが、新出単語等に関しては、知識・理解のほか正しく書くことも求められるため、そのための指導も別に行う必要がある。

成果と今後の課題

１年間の研究を通して、児童生徒に以下のような力が育ちつつあります。

〇英語に自然に親しむことができ、児童の意欲は、とても高まっている。英語に対する抵抗がなくなり、進んで表現しようという児童が増えている。（小）

〇校内研修の充実により、教員の外国語指導に対する抵抗がなくなり、指導力も向上している。（小）

〇保護者の外国語に対する関心が高まり、家庭での協力も得られている。（小）

〇英語で表現することへの抵抗が減り、作文問題や即興での会話でも自分の考えを表せるようになった。（中）

〇相手の目を見て話したり、自然な相づちを打ったりして、生徒が英会話を楽しむようになった。（中）

今後の課題としては、以下のような点を挙げることができると考えています。

△小学校と中学校の学習のつながりが、不十分である。学習の系統性や年間指導計画の見直しを進める必要がある。

△表現力の育成には、全教育活動を通した取組が必要不可欠である。外国語（英語）だけでなく、他教科で共通課題として取り組まなければならない。（小）

△生徒の学力や英語への関心には差があるため、その差を埋められるよう授業内外で支援していく必要がある。（中）

△読むこと・書くことも含め、４技能のバランスのとれた習得を目指して指導していかなければならない。（中）

外国語（英語）を通して、児童生徒の表現力育成を進めていますが、あらためて小中が課題を共有し、連携を深める必要があります。これからの未来を担う児童生徒の成長のために今後も共に手を携え、研究を深めてまいります。